

# 好事例視察の実施結果について (中間報告)

～目次～

「きよびー&とまと」の取組・・・p. 1

「また明日」の取組・・・・・・・・・・p. 3

「大山自治会」の取組・・・・・・・・・・p. 5

平成29年10月4日

第3回東京都地域福祉支援計画策定委員会



## 第3回東京都地域福祉支援計画策定委員会 好事例視察の報告

### 「きよぴー&とまと」の取組(八王子市)

団体名	きよぴー&とまと、You&I(友&愛)
活動地域	東京都八王子市清川町
会員数	120名(2017年8月時点)
活動概要	商店街の空き店舗を拠点に、地域の住民が主体となって、お弁当・お惣菜の販売、配食サービス、サロン活動、生活支援、子供支援等の活動を実施している。

#### 活動立ち上げの背景

清川町は、約50年前に開発された戸建ての住宅団地です。地域における高齢者(65歳以上)の割合が3割を超え、高齢者と若い世代の交流が不足がちであったことから、商店街の空き店舗を活用して、世代間交流と子供たちを支援する場所として立ち上げたボランティア団体「きよぴー」と、配食サービスを行っていた八王子ボランティアネットワークの「とまと」が協力し、2006年3月に「きよぴー&とまと」が結成されました。

また、サロンやホームサービス、企業との連携といった、活動の輪を広げる新組織として、きよぴー&とまとの隣の空き店舗で「You&I(友&愛)」を2011年7月に立ち上げました。

これら2つの組織は独立した会計で運営されていますが、月1回の会議で活動のビジョンや方針を共有しています。

#### 誰もが気軽に立ち寄れる居場所

地域の居場所づくりを行うため、「配食サービスを行いながら、世代間交流が自然にできる場所」「高齢者の生きがいづくりを提供できる場所」「次世代を担う子供たちの支援ができる場所」の3本柱を掲げ、商店街の空き店舗を拠点とし、次のような活動を展開しています。

お弁当・お惣菜の販売や配食サービスは火・木・土に実施しており、オープンすると近隣住民が次々と集まり、賑わっています。ミニ弁当は300円、お惣菜は一品100円から150円等と価格を抑えつつ、バリエーション豊かに提供しています。

サロン活動は月・火・木・金・土に実施しており、カフェや高齢者向けのパソコン教室、介護予防体操など、様々な取組を行っています。また、認知症の家族を介護している方向けのオレンジ・サロンを毎週水曜日に開催し、経験者等が家族の話を聞く取組も行っています。

高齢者支援では、サロンの他にも、高齢者あんしんセンターの出張相談室や、1回あたり500円で庭の草取り・電球交換といった生活支援を行うホームサービス(お助け隊)を行っています。お助け隊の活動は、八王子市の訪問型サービスBの登録も受けています。

子供支援では、川遊びや芋ほり、凧づくりなど、季節ごとのイベントを実施しています。今年度から子供向けの料理教室も始めました。高齢者と子供だけでなく、子供の親も含めた3世代交流のきっかけとなっています。

それぞれの活動に、約120名の会員がボランティアとして週1回から月1回のペースで参加しています。

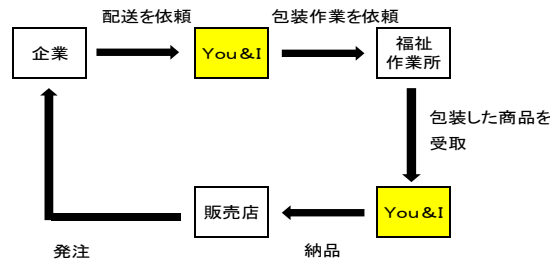
人が集まるようになったことで、商店街の他の空き店舗も埋まっていきました。



お弁当・お惣菜売り場コーナーの光景

## その他の取組

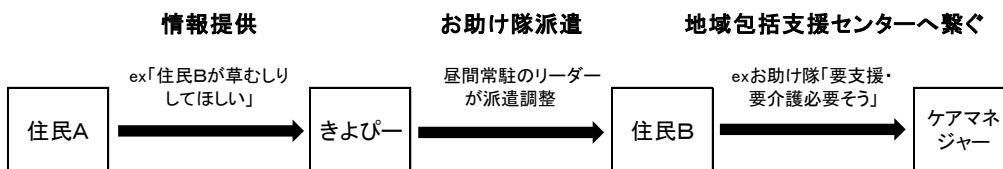
福祉作業所支援の取組として、企業と福祉作業所とを繋ぐキーステーションの役割を担っています。  
(天狗のかりんとう等)



## 工夫している点・ポイント

- お弁当・お惣菜の購入は、会員制(入会金500円)とすることで、本当に必要な人が購入できるよう仕組みを変えています。
- サロン活動では、男性向けの料理教室を開いたり昔の映画を上映したりと、提供するサービスを多数設けることで、住民が参加しやすくなるよう心掛けています。
- ホームサービスを実施する際は、警察署から支給された防犯ベストを着用し、防犯パンフレットの配布も同時に行っています。
- お弁当・お惣菜の販売や配食サービスのほかに、企業との連携による収入を確保したことで、家賃や光熱費等といったランニングコストへ充当する目途が立ち、安定した運営ができています。立ち上げ当初に住民や知人から集めた出資金の返済も終わりました。
- 毎月1回会議を開き、新しい企画や意見を出し合っています。まず行動に移し、その場その場でやり方や方針を変えるなど、柔軟な発想で取り組んでいます。
- 活動が地域に根付いたことで、地域の情報が集まるようになりました。ケアマネジャーと情報共有する機会を設け、今年度2回実施しています。

(住民からの情報提供イメージ)



## 課題と今後の展開

継続した活動を実施していくために、世代交代を進めていくことです。新しく入居してきた子育て世代の30~40代が増えてきたことで、高齢者支援は継続しつつも、子供支援に目を向けていく必要性を感じています。そのためにも、後継者の養成が重要になっています。



調理場での説明を受けている様子



今回の視察でご対応いただきました、副代表の梅沢さん、事務局長の片貝さん、大越さん(左から)

## 「また明日」の取組(小金井市)

団体名	NPO 法人 地域の寄り合い所 また明日
活動地域	東京都小金井市
定員数	認知症デイサービス12名 小規模保育 A 型9名(2歳まで) 認可外保育所6名(市内外問わず)
活動概要	二階建てアパートの1階5世帯分の壁を取り払い、1つの空間で認知症高齢者専門のデイホーム、認可保育園、認可外保育園、誰もが立ち寄ることができる寄り合い所の4つの事業を運営。

### 活動立ち上げの背景

「また明日」は、森田和道さんと眞希さんご夫婦が立ち上げた NPO が運営しています。20年以上前、和道さんは小金井市の特別養護老人ホームで、眞希さんは併設の病院の保育士として働いていました。ある日、眞希さんが3歳のダウン症の女の子を和道さんが勤める施設へ連れて行ったところ、高齢者の顔が一瞬にして華やいだ表情に変わり、ダウン症の女の子も満面の笑みで高齢者の懐に入っていました。

それまで、「与えられる」だけであった高齢者と女の子が、自然と結びつくことで、互いに「与える」存在になりました。その瞬間に立ち会ったことで、高齢者と子供が1つの空間で過ごせる施設を作りたいと考えるようになり、2006年12月に「また明日」の運営を開始しました。



施設内の様子（デイホーム、保育所、寄り合い所を利用している方々同士で自然と交流が生まれています。）

### 施設の運営

認知症デイサービス、認可保育所、認可外保育所、地域の寄り合い所の4つの事業の運営を、壁を取り払ったアパート5室分の1つの空間で行っています。

子供や動物(犬、猫)と同じ空間で過ごしているこの施設では、「支えられる」側だった認知症の高齢者が主体性を持つことで「支える」側ともなり、精神的に落ち着いている方がほとんどです。一緒に過ごす中で自然に子供の世話の手伝いをする方もおり、保育士が抱っこしても泣き止まない赤ちゃんを、あっという間に落ち着かせてしまうそうです。認知症デイサービスに通っている方の多くは、他の施設で問題があり断られた方や、これまで施設に通うことを拒んでいた方、在宅で寝たきりに近い生活を送られている方などです。

しかし、「また明日」で過ごし、子供たちとの「支え合う関係」の中で落ち着きを取り戻し、穏やかに過ごしています。不安になって施設の外へ出てしまう方は、いらっしゃいません。

保育所に通う子供たちは、高齢者と一緒に過ごしながら、おじいちゃんおばあちゃんの前ではドンドンしないとか前を横切らないといったことが自然にできるようになってきます。

デイサービスと保育所にはそれぞれ別にプログラムが流れていますが、あえて一緒に何かをしようとしたりはしていません。それでも、子供の手を引いて一緒にお散歩したり、子供の食事を見守ったりお手伝いしたり、子供の相手をしたり等、間仕切りの無い空間ならではの自然な関わり合いが随所で見られます。

職員は事業種別ごとに配置していますが、デイ担当だから泣いている子供に手を差し伸べない、保育担当だ

から高齢者の話し相手にならないということはありません。介護と保育とでそれぞれ専門性の違いがあり、予想もしなかったことやこれまでの知識や技術では対応できないことが多くありますが、「本人の主体性を尊重する」ことを大前提とし、専門性をあえて排除してマルチに対応する働き方を大切にしています。

職員にとっては、煩雑な動きが求められるため、ルーティーンワーク主体で分業が確立している介護職出身者は働きづらさを感じてしまうかもしれませんが、複数の動きを同時に処理しながらも子供に向き合う保育職種は適応が早い傾向にあります。また、ここで働く職員はほとんどが主婦ですが、ここでの仕事は、複数の家事をこなしながら近所付き合いもしている主婦感覚に近いものかもしれません。

### 主な活動とポイント

○住宅街にいきなり施設を開所させてしまうと地域の方々には不安を感じてしまいます。地域から理解を得るため、施設を開所する9か月前に地域へ引っ越しました。住民となり、町会等に参加し、顔見知りを作っていました。今では地域の皆さんから積極的に助けて頂ける関係を築く事が出来ています。

○ただし、そこに至る事が出来たのは森田さん夫婦だけの力ではなく、森田さん夫婦の思いに共感してくれた行政や地域の方々、知人友人等、多くの方々の陰日向ない力添えがあったそうです。

「私たちの知らないところで、ある人は大家さんに太鼓判を押して下さり、ある人は地域に頭を下げて回って下さった等々を後から知りました。お若い頃から近隣の方々と良好な関係を築いている大家さんは、私たちが挨拶回りに連れて回って下さり、ご近所さんから「あんた(大家さん)が連れてくる人だから大丈夫だ」等とお声もかけて頂きました。小金井市役所の多くの方々とも思いを共有し、どのように形作れば良いものができるかを行政の立場からアドバイス頂きました。施設をつくるということは、地域の様々な方々と繋がる事が出来ようやく叶うものだと思います。

私たちは職員皆で地域と繋がることを心がけています。現状は残念ながら、施設が単にサービスを提供し採算を取るだけの場所となっていて、職員が、自分が働く施設の隣にお住まいの方の名前さえ知らないケースがほとんどです。それでは、地域に根差し地域とともに存在すべき「福祉」施設を標榜できないと思います。職員一人一人が地域の方々で見知った関係でいるということが大切です。」と森田さん夫婦は話します。

○寄り合い所はどなたでも出入り自由な場所として、地域の様々な方々が出入りしています。特に放課後や夏休みには多くの小中学生が来訪し、子供たちやお年寄りの相手をしてしながら「近所のおばちゃんち」という認識で過ごしています。中には、不登校の中学生が日中の居場所として過ごす中で介護の進路を見出して高校に進学したケースや、「心配な子がいる」と地域の方から相談を受け学校や行政と連携しながら見守っているケース等もあります。

○近所の人たちが気軽に立ち寄れるようにするには、場所があればよいということではなく、「顔なじみがいるから」「赤ちゃんがいるから」「犬がいるから」など、「来たくなる理由がある」ということが必要です。そうした関係の中から、困りごとを話してくれるようになることもあり、必要があれば市役所や関係機関等に繋いでいます。

○そういった日々の活動の延長線上として、昨年より「みんなの居場所\*また明日」と名付けた活動も月1回のペースで開始しました。ただし、法人が運営しているのではなく、地域の有志が集まって役割分担をしながら運営し、職員もその一員として参加しています。対象は「貧困を抱えた子供」に限定せず、寄り合い所同様、誰でも利用できます。主な活動は、民生委員や地域の高齢者が中心となつてつくる食事の提供以外にも、学習塾をしていた方が子供の学習支援を行ったり、引きこもりだった若者たちが身近な大人として子供に接したり、子育ての悩みを抱える若い親御さんの話に参加者が耳を傾けたり等、多岐に渡ります。料金は子供が無料、大人のうち払える人は設置した箱に300円をそっと入れる形式を取っています。



## 第3回東京都地域福祉支援計画策定委員会 好事例視察の報告

### 「大山自治会」の取組(立川市)

団体名	立川市大山自治会
活動地域	立川市上砂町
会員数	約1,450世帯、4,000人
活動概要	加入率100%の自治会組織を基盤として、見守り活動、防犯活動、子育て支援、高齢者への仕事の提供、自治会葬、住民からの相談の受付や行政へのつなぎ等を実施

#### 活動立ち上げの背景

大山団地は、昭和38年に完成した都営上砂町一丁目アパートを中心とした団地で、約1,450世帯、約4千人の住民が暮らしています。そのうち、約400人が独居の高齢者です。住民の高齢化等に伴い、「孤独死」が頻発していましたが、平成11年に自治会長に就任した佐藤良子さん(現在は相談役)は、「人をたすけ、人に支えられる自治体でありたい」という思いで、自治会の再生に取り組み始めました。現在では団地の全ての世帯が自治会に加入しており、「自分たちでできることは、自分たちで行動する」という考え方が根付き、住民主体の見守りや支え合いなどが活発に行われています。



自治会長の橋本久行さん(左)と  
相談役の佐藤良子さん

#### 自治会の組織運営

大山自治会には、会長(1名)、副会長(5名)、会計(2名)の三役のほか、31の各棟には「区長」と呼ばれるリーダーを置いています。さらに、体育、文化、交通安全対策、防災・防犯、生活環境の5つの専門部会を設け、それぞれに専門部長を置いています。

役員は、住民による推薦投票を参考に選出しており、この手続を経ることで、自分たちで選んだ役員を応援する雰囲気生まれています。お祭りや運動会といった地域の行事では、実行員会が組織されることで役員だけに負担が集中しないようになっており、高齢者も広く参加できる体制を整えています。行事の際には、中央大学の学生が手伝っているそうです。

入居世帯は、月400円の自治会費、月1,500円の管理費を支払います。管理費は、棟ごとの管理となっており、活動は、清掃活動を必ず行うことのほかは棟ごとの裁量に任されていますが、活動状況は日報に記録し、月1回の役員会に報告され、情報が共有される仕組みとなっています。ガラス張りの会計を心がけており、管理費が余った場合は、住民に返還されます。

自治会では、常勤の事務職員を1名雇用しています。事務職員が自治会事務所での住民対応、役員会の議事録作成、自治会だよりの配達などを担うことで、役員は地域活動等に専念することができています。

#### 主な活動とポイント

高齢者や子供たちを支えるため、「向こう三軒両隣」の支え合いを展開しています。住民に対し、毎日、両隣の家のポストに郵便物がたまっていないか、ベランダからいつもと違う様子がないか見守ることを義務付けています。また、電気、ガス、水道のライフライン事業者や新聞販売店、コンビニエンスストア等も見守りに協力しています。住民等が異変に気が付いたときには、自治会事務所や役員に連絡が入るようになっており、必要に応じて

民生委員や行政につなぐ仕組みがつくられています。見守りの意識が住民に浸透しており、子供から情報が入ることもあるそうです。

事務所や役員には、ご近所トラブルなど様々な相談ごとが寄せられます。事務所で予約制で相談を受けるほか、会長は自治会活動専用の携帯電話を持っており、24時間いつでも緊急の相談に応じます。相談者の立場に立って話を聞き、助言することで解決できるものが大半ですが、虐待やアルコール依存、認知症の周辺症状など、困難な問題については、行政などにつなぐ体制が取られています。

自治会では全ての住民の名簿を管理しており、民生委員、消防署と共有しています。名簿には家族の連絡先も登録されており、緊急の際に連絡できるようにしています。

パトロールや清掃、見守り、葬儀、ゴミ出し、食事づくりなど様々なボランティアチームが組織されており、延べ400人以上の住民が活動しています。住民が様々な活動に安心して参加できるよう、自治会単位で傷害保険、動産保険に加入しています。近所の市の施設を拠点としたサークル活動も盛んで、180に上る団体がスポーツや文化などの活動を行っており、住民の居場所にもなっています。

独居の高齢者が多い団地では、葬儀も大きな課題です。葬儀の手伝いボランティアが登録されており、できるだけ経費をかけずに皆でお見送りができる自治会葬を開催しています。死亡届の提出や火葬の申込み、その後の財産管理まで、自治会で幅広い対応が可能となっています。

子育て支援では、虐待の問題を契機として、大山MSC(ママさんサポートセンター)を設立し、子育て経験があって信頼できるメンバーによる無料の一時保育や育児相談を行っています。

高齢者の自立を支えるためには、元気で意欲のある高齢者に働く場を提供することが必要との思いから、高齢者の有償ボランティア組織を立ち上げ、団地内の公園の草取りや老人ホームの外溝清掃等を受託しています。今後は、年金にプラス5万円程度の収入が得られるような事業を立ち上げることを目指しています。

4千人の住民が住む団地は人材の宝庫です。人材を見つけて活かすという点では、会社の経営と自治会運営は共通していると、自ら会社を立ち上げた経験も持つ佐藤さんは言います。

## 課題と今後の展開

活動に参加できずに課題が外から見えにくい人をどう支えるかという点が課題となっています。個人情報の問題から、行政から、新規の入居者がどのような課題を抱える人なのかといった情報が自治会に入っていないようになってきており、生活状況に合わせた見守りやサポートが難しくなっていることが課題です。

また、入居者の高齢化が進み、認知症のお年寄りの徘徊など、サポートが追い付かない状況も生じていることも課題です。

「自治会が地域のいちばんの土台であり、自治会の再生を考えてほしい」、「住民の立場から見たときに、本当に住民のためになっているのかという観点で福祉を考えてほしい」、と自治会長の橋本さんや相談役の佐藤さんは訴えていました。